長尾雨山と呉昌碩

松村茂樹

はじめに

近代の漢学者・長尾雨山（一八六四―一九四二）は、足かけ十二年にわたる上海滞在中、多くの中国文人と交流した。とりわけ中国最後の文人と称せられる呉昌碩（一八四四―一九二七）との交誼は親密で、雨山に大きな影響を与えた。

筆者は、拙稿「呉昌碩と長尾雨山」（二〇〇七初出／拙著『呉昌碩研究』・二〇〇九・研文出版 所収）で、呉昌碩と雨山の本格的交友開始の時期を考証し、二人がやりとりした詩文書画資料を当時において可能な限り紹介することにより、二人の交流の実態を明らかにした。

本稿では、新たに発掘した資料、および前稿でその存在のみを紹介した詩文等を読み込むことにより、雨山が呉昌碩と交流したことで得た意義を考察したい。このことにより、近代日中文化人交流における重要な一断面に照明を当てることができるだろう。

一、長尾雨山の略歴

長尾雨山は、通称を槙太郎、名を甲、字を子生といい、雨山、石隠、无悶と号した。その居を何遠楼、艸聖堂、漢塼斎という。讃岐高松の人。東京大学古典講習科を卒業後、学習院教師、東京美術学校講師[1]、第五高等学校教授、東京高等師範学校教授などを歴任、いわゆる教科書疑獄事件にまきこまれ、無実の罪で東京高師を辞職[2]、上海の商務印書館に勤務し、呉昌碩らと交わり、河井荃廬と共に西泠印社同人にもなった。上海在住足かけ十二年で帰国し、京都に寄寓、平安書道会副会長などをつとめ、在野の学究として尊敬を集めた。

二、呉昌碩との出会い

長尾雨山は、一九〇三年十二月、上海に移住し、愛而近（エルジン）路（現：安慶路）二号に住む。この当時、呉昌碩は蘇州に住んでおり、上海には公務および売画のため、時おり出て来るだけであった。

雨山は、商務印書館で教科書編纂の仕事に携わりつつ、上海の文人たちと交流した。一九〇五年には、会稽の金石（生卒年未詳）と知り合い、その縁で同年の中秋（旧暦八月）に陽湖の劉炳照（一八四七―一九一七）と交誼を結んで、共に詩会を開くようになる。[3]

劉炳照『復丁老人詩記』（一九〇八・私刊本・関西大学図書館内藤文庫蔵）に、一九〇五年の詩として、

東海詩人接席初、双清別墅集簪裾。聯吟三過聴芝館、読画重尋亦愛廬。

〔日本の詩人と席を接するのは初めてで、双清別墅には貴人が集う。聯句すること三たびの聴芝館（汪淵若）、画を読んで重ねて考究する亦愛廬（朱念陶）。〕

が見え、これに、

日本詩人長尾語（雨）山、首創詩社于徐氏双清別墅。継之者聴芝館主人汪淵若。亦愛廬主人朱念陶、敲詩読画、為海上別開生面。

〔日本詩人の長尾語（雨の誤り）山は、はじめて詩社を徐氏双清別墅（徐園）に創設した。これを継いだのが聴芝館主人汪淵若（洵）である。亦愛廬主人朱念陶（錕）は、詩を考え画を読んで、上海に新生面を開いた。〕

という注が付せられている。

この詩会は、劉炳照と同郷の汪洵（一八四六―一九一五）による聴芝詩社、劉炳照門下の朱錕（一八六八―？）による亦愛廬読画雅集、そして雨山による徐園集からなり、これらが持ち回りで開催されていた。[4]

これらの詩会は、単に詩を作るのみならず、書画をよくする汪洵や朱錕が主要メンバーであったこともあり、いわば文墨の雅会となっていた。また、汪洵は、光緒中葉から上海に設けられていた海上題襟館金石書画会の会長をつとめており、その副会長であった呉昌碩が加わることになるのも必然であった。

劉炳照が自らの知己を詠じた詩を集め、一九〇五年に刊行した『感知集』（潯谿劉氏付刊・関西大学図書館内藤文庫蔵）には、呉昌碩を詠じた「安吉呉倉碩大令俊卿」詩も見える。

苦鉄善摹印、鈍刀鐫頑石。画学陳章侯、詩宗李太白。

一官羈淞南、三載笑言隔。

〔苦鉄（呉昌碩の別号）は篆刻をよくし、鈍刀で頑石に刻す。画は陳章侯（洪綬）を学び、詩は李太白（白）を宗とする。一官を得て淞南（上海北部）に旅居し、三年笑顔と言葉を抑制している。〕

篆刻をよくし、詩画にすぐれながら、不本意な役人生活をしている呉昌碩を簡潔に描いている。また、『感知集』の封面は、呉昌碩の次女・呉丹姮（次詹）の手になり、この詩集が刊行された一九〇五年までに、劉炳照と呉昌碩は親交を有していたことがわかる。そして、前述のように、雨山は同年の中秋に劉炳照と交誼を結んでおり、『感知集』の題簽を書き、題詞も寄せている。よって、この頃には、劉炳照を通して、呉昌碩と知り合っていたと思われる。

（図1）劉炳照『感知集』（光緒三十一年（一九〇五）刊／関西大学図書館内藤文庫蔵）

劉炳照の詩集である『無長物斎詩存』（一九〇八・私刊本・関西大学図書館内藤文庫蔵）に、一九〇五年の仲冬（旧暦十一月）既望に作られた「仲冬既望、亦愛廬読画雅集、即席賦贈念陶、並索同坐雨山、淵若、石香、夔伯、小蓮、恂卿諸子和」詩（四首）が見える。その第一首を引いておく（〈　〉は割注、以下同）。

読画招新侶、駆車向澗阿。七賢良宴会、二客病頭陀〈呉倉碩、陸廉夫因病未与斯会、両君年踰六十、均未留鬚、故云〉。邱壑胸中具、煙雲眼底過。憐予衰更甚、対酒不成歌。

〔画を読むのに新しい仲間を招いており、車を駆って高士の集まるところに向かう。七賢は宴会を楽しみ、二客は托鉢に病む〈呉倉碩（昌碩）、陸廉夫は病のためこの会に参加しておらず、両君は六十歳を越えているが、均しく鬚を蓄えていないので、このようにいう〉。画境は胸に残っており、筆勢は眼に浮かぶようだ。憐れ私は衰えること更に甚だしく、酒を前にしても歌を成さない。〕

劉炳照は、画にすぐれた呉昌碩および陸廉夫（一八五一―一九二〇）に会うのが楽しみであったようだが、欠席と知り、大いに落胆している。この時（前述の朱錕による亦

愛廬読画雅集の初回）、雨山は出席しており、呉昌碩は欠席であったが、同じ劉炳照の知友として、会う機会は少なからずあったと思われる。

三、書法と遺民

ただ、前述のように、当時、呉昌碩は蘇州に住んでおり、上海には時おり出て来るだけであったので、雨山との親密な交際は、呉昌碩が上海に移住し、雨山の隣人になってからであった。

筆者はすでに、前掲の拙稿「呉昌碩と長尾雨山」で、一九一一年夏、呉昌碩が上海に移住し、一九一二年に愛而近路均益里第五弄、つまり雨山の近隣に引っ越してきたことにより、両者の緊密な交際が始まったと思われることを考証した。

呉昌碩は、隣人となった雨山を、一九一二年、自らのパトロンである周夢坡が主宰する消寒雅集（消寒集）、淞浜吟社（淞社）に参加させる。これらの詩会は、辛亥革命をきっかけに、いわば遺民として上海に隠棲する人々によるもので、呉昌碩は、その長老的存在であった。前述のように、雨山は、劉炳照らと共に、詩社活動をしていたので、これは、周夢坡系詩社と劉炳照系詩社の合同ということにもなった。(5)

また、呉昌碩は、雨山を自らが社長をつとめる印学研究団体である杭州の西泠印社同人に迎えている。西泠印社は、清の丁敬を首とする浙派を再興するため、その子孫である丁仁らが設立した印学団体であるが、呉昌碩が参画し、さらには社長になったことで、文人趣味の色あいを強めていた。そういった中で、篆刻家ではない雨山の加入は、この方向性をより強めたといえる。

さらに、一九一二年夏、呉昌碩は、雨山に自蔵の「長生未央塼拓本」を贈り、「長生未央塼拓本為長尾」詩（『缶廬詩』巻五、『缶廬集』巻二所収）を作っている。

漢塼光瑩瑩、紅瓣誰剔繡。
況寵吉翔字、復宝氈蝋旧。
君友同君奇、持贈不自富。
長生未央文、密意頌好寿〈二字見竟銘〉。
缶廬道亦在、残甓抱左右。
永寧拓双行、廿字類史籀。
赤烏認八分、波磔謝古茂。
鑿硯誓学書、有得徒自謬。
君詩推長城、君字重列宿。
以塼顔虚室、人詩両勁瘦。

摩挲復摩挲、長風生海寳。
醉眼看乾坤、不似古時候。
〔漢塼に光を放つ、紅苔を誰が削ろうか。
ましてや吉祥の字があり、さらには拓が旧いのもいい。
君の友は君と同じく奇特で、手ずから贈り自らを富ませない。
長生未央の文は、親密なる情意で長寿をたたえる〈この二字は鏡銘に見える〉。
わが缶廬の道もまたここにあり、残甓を左右に抱えている。
漢の永寧の塼の拓は二行で、そこにある「廿」字は籀文に類する。
呉の赤烏の塼は八分で、その波磔は古茂である。
これを鑿って硯にして学書を誓うが、いたずらに自己流になりがちだ。
君の詩は長城をも推すほどで、君の字は星座を重ねたかのよう。
塼の拓本を簡素な部屋に掛ければ、人も詩も共に勁瘦となろう。
模索しまた模索すれば、遠くからの風が海に生じるはず。
醉った眼で天地を見れば、古の時とは異なるようだ。〕

（図2）呉昌碩与長尾雨山「長生未央塼拓本」（壬子（一九一二）夏／『墨美』第十五号より）

呉昌碩は、古文学派の学者として、また、篆刻家として、陸心源『千甓亭古塼図釈』などにより、古塼を学び、また、自らも蔵していた。そんな自らの蔵品のうち、漢の「長生未央塼拓本」を雨山に贈ったのである。また、詩中で、自蔵の「漢の永寧の塼」「呉の赤烏の塼」についての考証も記している。これは、雨山に不足する「勁瘦」を身につけさせようとする配慮である。呉昌碩は、詩中で、雨山の詩を「長城をも推すほど」とし、字は「星座を重ねたかのよう」と絶賛しているが、日本人であるがゆえの「古意」と「質樸」に基づく「勁瘦」が不足していることを見抜いていた。よって、それを身につけている自らが、「長生未央塼拓本」を贈ることで、雨山にも身につけさせようとしているのである。ただし、詩の最後で、今や古の時代ではな

く、そんな中、古塼を学んでいる自分も、また、雨山にそれを伝えようとする行為も、もはや守旧的なことでしかないと歎くのである。

その二年後の一九一四年の閏五月、呉昌碩は、雨山の帰国にあたり、「墨梅図」（長尾正和、鶴田武良『呉昌碩』・一九七六・講談社 所収）を与え、詩を題した。

鰲身映天水奔赴、天上尾星欲東渡。
滬浣結隣坐三載、数典談詩時却歩。
羨君風格斉晋唐、書法遒勁張鍾王。
意造不学東坡狂、奇石蒼寒索我画。
補其虚壁状其介、未許袍笏顛翁拝。
顛翁不拝石点頭、蔵古満屋書満楼。
側身似欲随校讐、乾坤頒洞変益大。
有国可帰真可賀、嗟我茅屋西風破。
贈無長物詩難成、佐以画梅君性情。
君無憶我君且行、老眼只盼天下平。

長尾先生帰国有日矣。写此持贈、即乞両正。甲寅閏五月幾望、安吉呉昌碩、時年七十有一。

〔王維が阿倍仲麻呂の帰国を詠じたように大海亀は天に映じて水は目的地へと急ぎ流れ、天上の尾星のような長尾君は東のかた日本に帰ろうとしている。

上海で隣人となっていつとはなしに三年になり、典故をあげ詩を談じては時にあとずさりしたものだ。

うらやましいことにあなたの風格は晋唐の人のようで、書法の力強さは鍾繇・王羲之よりも壮んである。

意のままに作るが蘇東坡の狂態は学ばず、奇石の蒼寒なるさまを私に画くよう求める。

それを壁に掛けてその耿介をあらわし、礼服を着た米芾が拝すことなど許しはしない。

米芾が拝さなければ石はうなずき、古物を蔵して家に満ち書物は楼に満つ。

二人して校勘に従事していたいのだが、天地は混沌として変乱はますます激しい。

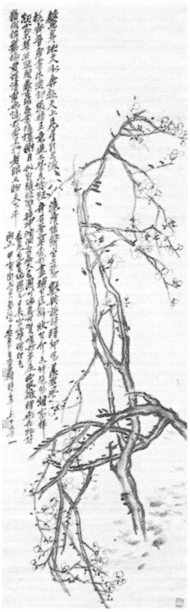
帰る国があることはまことに慶賀すべきで、嘆かわしくも我が茅屋は西風に吹き破られている。

餞別を贈ろうにも良いものがなく詩もなかなかできないので、補いのため画梅を贈るのはあなたの性情にふさわしいからだ。

あなたは私のことなど心配せずさあ行きなさい、老いぼれた私はただ天下の平らぐのを望むのみだ。

長尾先生の帰国が間もなくとなった。これを画いて手づから贈り、詩画の斧正を乞う。甲寅（一九一四）

閏五月幾望（十四日）、安吉呉昌碩、七十と一歳である。」



（図3）呉昌碩「墨梅図」（甲寅（一九一四）閏五月幾望（十四日）／『呉昌碩』講談社より）

詩中に、「上海で隣人となっていつとはなしに三年になり」とあることから、呉昌碩が愛而近路に移って来たのは一九一二年であることが窺える。呉昌碩は雨山の詩才に敬意を表し、書法をほめる。ただし、雨山の書法は、ほとんどの日本人がそうであるように、王羲之書法であり、呉昌碩の正鋒に基づく金石の書法ではない。それでも、呉昌碩は、雨山の整然としてきまじめとも言える書法を、蘇東坡の「狂態」や米芾の奇行を否定してまでも称えるのである。

そして呉昌碩は、詩の後半で世の変乱を嘆き、雨山が「帰る国があることはまことに慶賀すべき」と、自らが国を無くした遺民であることを表明している。

四、共通する思い

その後、雨山は、帰国前に中国をめぐる大旅行に出かけ、一九一四年の冬、帰国の直前、前出の陸廉夫が「海浜話別詩画巻」（京都国立博物館蔵）を画いて与え、これに呉昌碩が篆書で題を書き、旧友の鄭孝胥（一八六〇―一九三八）および呉昌碩が跋詩を書いている（後に李瑞清（一八六七―一九二〇）も跋を書いている）。この呉昌碩跋詩を見よう。

且歇東坡屐、言開北海尊。
道心存瓦甓、游跡繢昆侖。
秋水新詩魄、滄溟古月痕。
帰與我羨汝、軼蕩仰天門。

甲寅冬仲

雨山先生東帰、詩以言別。教我為幸。呉昌碩。

〔しばし蘇東坡のように屐をはいての旅を休められよ、ここに孔北海のように知己をもてなす酒樽を開けよう。あなたの心は私が贈った長生未央塼にあり、その游跡は西のかた昆侖までをも彩られた。

秋の出水は詩魄を新たにし、漲る滄海は月影を古にする。

さあ帰りなさい私はあなたが羨ましく、ほしいままに宮門を仰ぐ。

甲寅（一九一四）冬仲（旧暦十一月）

雨山先生が東に帰るので、詩でもって別れを言う。お教え願えれば幸いである。呉昌碩。」

（図4）「海浜話別詩画巻」呉昌碩題および跋（京都国立博物館蔵（長尾コレクション）／『中国近代絵画と日本』より）

詩中に見える「道心存瓦甓」は、『荘子』「知北遊篇」に見える、瓦甓のようなものにも道がそなわるという一節に基づいているが、ここでは、自らの心が瓦甓つまり古塼にあること、そして、その古塼つまり「長生未央塼」を雨山に贈ったこと、すなわち雨山との親密な交誼が始まったことを述べ、「游跡は西のかた昆侖まで」と、雨山の帰国前の大旅行を述べて、雨山との出会いと別れまでを言う。そして末尾でまた帰る国がある雨山を羨ましいとし、「ほしいままに宮門を仰ぐ」と述べて清朝遺民であることを表明する。もとより、こういった表明は、雨山が真の知己なればこそであろう。

雨山の帰国後、二人は手紙で詩書のやりとりをし、雨山が主宰する寿蘇会などには、呉昌碩は書画を送っている。雨山は、呉昌碩を日本に紹介すべく、高島屋美術部で呉昌碩の展覧会を本格的な個展に限っても計三回開き、それらの図録に序を寄せている（雨山と寿蘇会を共に主宰した富岡謙蔵（一八七三―一九一八）の父・富岡鉄斎（一八二七―一九二四）の京都市美術工芸学校での教え子である谷上隆介が高島屋美術部の部長をしていた[6]）。これら図録の序は、呉昌碩の人と芸術の本質を余すところなく描いており、呉昌碩理解のための最もすぐれた文献となっている。

まず、一九二二年に開催された「呉昌碩書画新作展」の図録・谷上隆介編輯兼発行『缶翁墨戯』（一九二二・高島屋呉服店美術部）の序の冒頭で、雨山は呉昌碩を、

缶廬先生者、清季高士也。

〔缶廬（呉昌碩）先生は、清末の高士である。〕

として、呉昌碩を清の人とし、遺民であることをまず謳っている。そして、

辛壬以来、屏跡海隅、寄興幽深、耿介忠憤、情形乎辞、如読宋遺民詩。有客語及時事、輒云我大聾也、黙不復答、人悲其志矣。

〔辛壬（一九一一、一二年）以来、海浜（上海）に隠棲し、情趣を奥深いところに寄せ、耿介の思いや忠義からの憤りが、言葉となって表れて、宋の遺民詩を読んでいるかのようであった。客が社会情勢に話し及んでも、すぐ私は大聾であると言い、黙して再び答えず、人はその志をせつなく思ったものだ。〕

と述べ、呉昌碩の所謂「胸中不平の気」(7)を代弁しており、知己たる雨山の呉昌碩への深い理解が示されている。

これに続く、一九二六年開催の「呉昌碩先生新作書画展覧」の図録・堀喜二編輯兼発行『缶廬近墨』（一九二六・高島屋呉服店美術部）の序でも、

国変以後、唯書甲子、人以比陶彭沢。其志趣度越於流俗。

〔辛亥の国変以後、国号を書かずに干支だけを記し、人は陶彭沢（淵明）になぞらえた。その心馳せは世俗を超越している。〕

と記し、遺民であることが呉昌碩の高潔につながっているという。

そして、一九二八年、呉昌碩歿後に開催された「呉昌碩遺墨展」の図録・堀喜二編輯兼発行『缶廬遺墨集』（一九二八・高島屋呉服店美術部）の序では、呉昌碩との名残の語らいを述べる。

顧甲寅歳、予与先生話別淞浜。先生懐送別詩来、執予手云、君遠去矣、僕既老矣、恐不可再見矣、言未畢而双涙並下。予亦掩面歔欷。後毎雁魚往来、輒約重晤、今也則亡、擲筆黯然。

〔思い返せば甲寅の年（一九一四）、私は先生と淞浜（上海）で名残の語らいをした。先生は送別の詩を懐にして来て、私の手を執り、「君は遠く去ってしまうが、私はすでに老いており、恐らくは再び会えはしまい」と、言い終わらぬうちに両の眼から涙が流れた。私もまた顔を覆ってすすり泣いた。その後、手紙のやりとりがあり、再会を約していたが、今やその機会は失われ、筆を擲って胸ふさいでいる。〕

つまり、これら三つの序には、遺民たるがゆえに、「胸

中不平の気」を有する呉昌碩と、雨山自身の深い心のつながりが、切実たる筆致で描かれている。この呉昌碩とのつながりの根底には、雨山自身が有する「胸中不平の気」があったのであろう。雨山の「胸中不平の気」とは、無実の罪で東京高師を辞職し、上海に流寓するという不本意から発せられている。

雨山の「胸中不平の気」を如実に表した詩に「五十自嘲」詩（長尾尚正編輯兼発行『无悶室手沢』・一九四二・私刊本 所収）がある。(8)

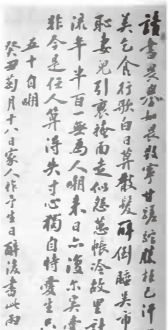
読書畏誉如畏毀、寧甘蹉跎勝枉己。
汗漫江湖敢自豪、異郷蓴鱸聊復美。
乞食行歌白日莫、散髪酔倒睡呉市。
故歩蹣跚起又顛、傍人指笑未知恥。
妻児引裏掩面走、似怨蕙帳冷故里。
計疎空悔不学稼、三径就荒嬾復理。
流年半百一無為、人嘲来日亦復尓。
奚嚢貯詩無補世、白頭猶与饑寒倚。
昨非今是任人算、得失寸心独自恃。
愛生只好学瓦全、抱朴不須借青紫。
五十自嘲、癸丑菊月十八日、家人作予生日、酔後書此。雨山長尾甲、時客申江。

〔学問をして誉められるのを畏れること毀られるのを畏れるようにし、むしろ不遇に甘んじて己の道を枉げることに勝つほうがいい。
江湖に放浪するのをあえて誇りとし、異郷で故郷を思うのもとりあえずはまたいいものだ。
伍子胥のように乞食し行歌して日が暮れ、散らし髪で酔って倒れ呉市に睡る。
もとの歩みでよろめいて起きてはまた倒れ、傍らの人は指さして笑うが恥を知らない。
妻や子供は家に引き入れ顔を覆って立ち去り、家族を顧ないことを恨んでいるようだ。
処世に疎くいたずらに農耕を学ばなかったことを悔やみ、陶淵明のいう三径が荒れていようと整えるのも懶い。
五十歳になっても一つとして成し遂げたものがなく、人はこれからもこんなものだと嘲る。
どうして書きためた詩を世に問いたくないことがあろう、だが白髪頭になってもなお飢えと寒さが寄り添っている。
陶淵明のいうように官を辞した方がよかったかどうかは人の見方に任せるが、杜甫のいうように作品に込める甘苦得失はひとえに自らが負うものだ。

生を惜しんで体面をかまわず生き延びるすべを学ばざるを得ないが、素志を貫いて顕貴に頼るようなことはない。

五十の自嘲、癸丑（一九一三）菊月（旧暦九月）十八日、家人が私の誕生祝をしてくれ、酔った後にこれを書いた。雨山長尾甲、時に申江（上海）に客居している。」

（図5）長尾雨山「五十自嘲」詩（『无悶室手沢』より）



この雨山の自嘲の源泉となっている「胸中不平の気」は、あるべき官をなくしたところから来ている。これは不遇の上に、あるべき国までなくした呉昌碩の思いと通じるところがあったのであろう。

むすびにかえて

雨山は帰国後、書画を鬻いで生計を立てたが、会心の作でなければ呉昌碩から与えられた刻印を用いなかったという。[9] ここに紹介する「老梅図」（筆者自蔵）にも呉昌碩の刻印（「長尾甲」白文印・「石隠」朱文印・「雨山居士」朱文印）が捺されており、会心の作であることがわかる。この題詩を読んでみる。

千尺寒嶺古渭陲、老梅臨水一枝垂。
山中無客問消息、開落従来秪自知。

〔千尺もあろうかという寒々とした山の峰が古渭という辺境の地にそびえており、
そこに老梅が水に面して一つ枝を垂らしている。
山の中にはこの老梅のことを聞きに来る人などおらず、
花の開落はこれまでずっとただ老梅自身が知っているだけなのだ。〕

（図6）長尾雨山「老梅図」（筆者自蔵）

雨山は、自らを、辺境にあって誰に知られることもなく花を咲かせ、散らしている老梅に喩えている。これこそが、帰国後の雨山の自照であったのだろう。

そして、この自照に呉昌碩から与えられた印を捺し、呉昌碩と通い合う思いを共有したのである。

注

(1) 長尾雨山『中国書画話』(一九六五・筑摩書房)「著者略歴」明治二二年(一八八九)の項に「東京美術学校教授兼務」とあるが、東京芸術大学総合アーカイブセンターの吉田千鶴子氏によると、今でいう非常勤講師の立場であったとのことで、ここでは「講師」としておいた。

(2) 長尾雨山と教科書疑獄事件については、樽本照雄『清末小説閑談』(一九八三・法律文化社)、同『初期商務印書館研究増補版』(二〇〇四・清末小説研究会)参照。

(3) 劉炳照『復丁老人詩記』(一九〇八・私刊本)による。長尾雨山の上海における詩社創設および詩会参加については、筆者による口頭発表「長尾雨山が上海で参加した詩会について」(二〇一三、一〇、三・日本中国学会第六五回大会・秋田大学)、および同発表をまとめた論文「長尾雨山が上海で参加した詩会について」(『日本中国学会報』第六十六集・二〇一四 掲載決定済)で論じた。

(4) 劉炳照『無長物斎詩存』(一九〇八・私刊本)による。

(5) このことに関し、長尾雨山の胸中に大いなる葛藤があったことを、前出の口頭発表「長尾雨山が上海で参加した詩会について」で論じた。

(6) 長尾雨山が高島屋での呉昌碩展覧会に果たした貢献については、拙稿「呉昌碩と高島屋」(二〇〇五初出/拙著『呉昌碩研究』・二〇〇九・研文出版 所収)で論じている。

(7) 呉昌碩同郷の詩友である施浴升は、呉昌碩の詩集『缶廬詩』序文の中で、「吾友呉子倉碩、性孤峭、有才未遇、以簿尉待次呉下。其胸中鬱勃不平之気、一皆発之於詩。〔わが友の呉昌碩は、生まれつき心が厳しく世俗と合わないので、才能があるのに不遇で、下級役人をしながら蘇州で正当な官に選任されるのを待っている。その胸中に鬱積した不平の気は、ひとえにみな詩にあらわれ出ている。〕」と述べている。

(8) この詩については、杉村邦彦「上海時代の長尾雨山の翰墨生活一斑 ―五十自嘲詩と潘存臨鄭文公下碑跋―」(書学書道史学会編『書学書道史論叢/2011』・二〇一一・萱原書房 所収)に取り上げられている。

(9) 松丸東魚編輯『呉昌碩印譜第二集』(一九五六・白紅社)所収「解説」に、「(長尾雨山)先生は呉翁の刻印を非常に大切にされ、会心の作でなければこれを用ゐられなかつたさうで、又、使用後は真綿の如きもので叮嚀にこれを拭つておかれたとも聞いて居る」とある。なおこの「解説」は、松丸東魚著・松丸啓子編『東魚文集』(一九七七・松丸道雄)に再録されている。

本稿は、平成二三年度科学研究費補助金(基盤研究(C))「呉昌碩と日本人士」(研究代表者 松村茂樹 課題番号23520180)による研究成果の一部である。